

主役は団塊のジュニア世代

横浜の人口ピラミッドには2つのふくらみがある。1つは50歳代後半の団塊の世代だ。大学紛争などを始め、青少年期から様々な社会的なムーブメントの主役となってきたこの世代の数の多さはこれまで広く認知されてきた。しかし意外なことに、横浜市の人口ピラミッドで最大のボリュームを持つのは、この団塊の世代のふくらみではない。団塊の世代のジュニアたちを核とした30歳代の市民が形成するふくらみなのである。

団塊のジュニアは階層化社会の申し子か

横浜市の人口ピラミッドで最大のボリュームを占めるのが、団塊のジュニアを核とした30歳代の市民であるということは、高齢化が進んでいると言っても、横浜がまだまだ働き盛りの都市であるということを示すだけでなく、将来にわたって持続的に成長しているだけの潜在力を有していることを示している。

そして近年、この団塊のジュニア世代を、日本における中流の崩壊や社会の階層化、二極化の「主役」として取り扱う論調が目立ち始めている。

「この団塊ジュニアを中心とする若者がこれから生きていく社会は、これまでとは違う。同じ会社に勤める同期の人間でも、30歳をすぎれば給料が倍も違ってくる。極端に言えば、わずかのホリエモンと、大量のフリーター、失業者、無業者がいる。社会全体が上昇気流に乗っている時は、個人に上昇意欲がなくても、

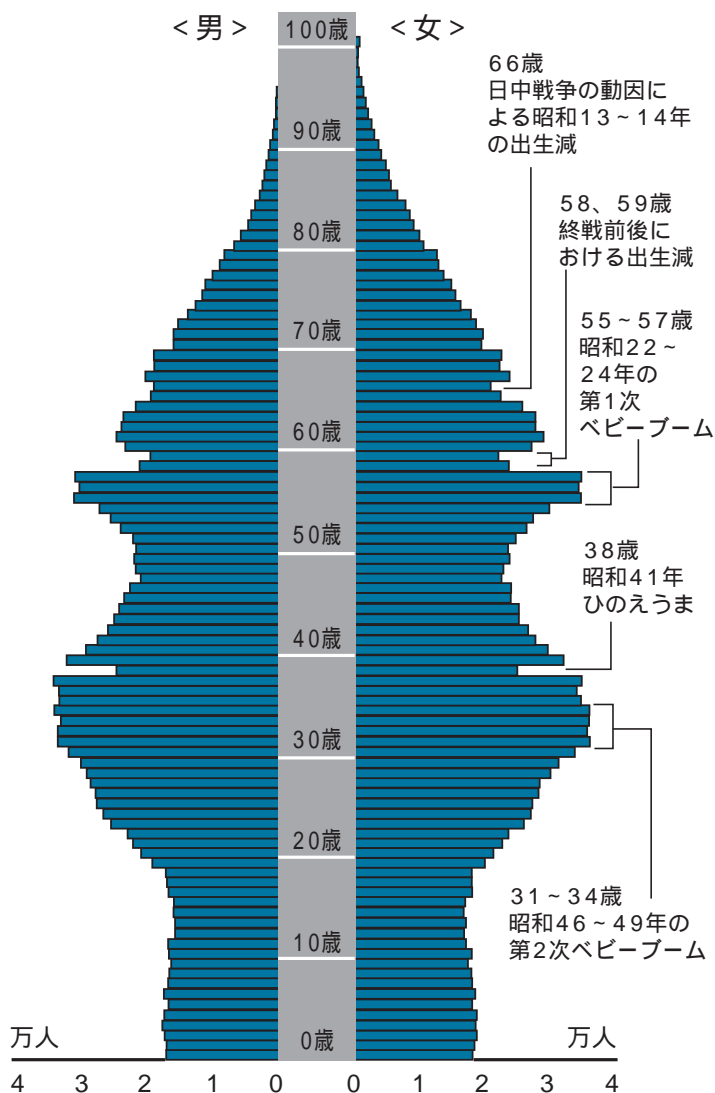
知らぬ間に上昇できた。しかし、社会全体が上昇をやめたら、上昇する意欲と能力を持つものだけが上昇し、それがないものは下降していく。」

『下流社会 新たな階層集団の出現』三浦展著 光文社新書 2005年

階層化社会の主役であるかどうかは別にしても、この世代がエピソード2でのべた横浜の「世帯と暮らしの多様化」を先導している世代であることは間違いない。

たとえば、団塊の世代であれば、30歳代で大部分が結婚し、子どもを産んで育てていたはずである。ところが今の30歳代は、未婚で親と同居している人も

横浜市の人口ピラミッド(平成17年)



大勢いるし、結婚しても子どもを持たない共働き世帯(ロックス)も多い。また、年収が半分になった子持ち夫婦(エクス)や父子・母子家庭も増加している。このような「世帯と暮らしの多様化」を先導する彼らのメンタリティーを考えると、彼らが見落としてはならないのは、彼らが「家庭」、「学校」、「地域社会」、「会社」など成長・拡大期には、確固としてゆるぎなかった「生活の場」がゆらいでいく最前線を体験しながら10歳代、20歳

代を過ごしてきたことだ。それを考えるうえで象徴的な事件が、彼らが10歳代であった1980年代前半の横浜で起きている。

「横浜ホームレス」殺傷事件の衝撃 1983年(昭和58年)の1月から2月にかけて、横浜市中区内でホームレスが次々と襲われ、殴る、蹴るの暴行を受け、死傷者が続出するという事件が起き、横浜市内に住む無職の少年3人、定時制高

校生2人、中学3年生2人、中学2年生3人の10人の少年が傷害致死の疑いで逮捕された。

中学生が含まれていたことから、「中学生による『ホームレス』連続殺傷事件」として、センサーショナルに報道され、社会に大きな衝撃を与えた。市内はもとより全国的なレベルで大きな教育論議を巻き起こすこととなった。

少年たちの襲撃の動機は、いずれも学校の成績が悪く、落ちこぼれ扱いを受け、さらに家庭内に問題を抱えていたため、学校にも家庭にも居場所がなく、その不満のはけ口を、自分たちよりも立場の弱い路上生活者に求め、襲撃したといつことであった。

1950年代から70年代まで、学校へ通つことは、あたりまえのことであった。また放課後に児童対策など構えなくても、学校が終われば、各地域に遊びの集団と空間が存在していたし、遊び疲れて家に帰れば、大家族、小家族を問わず、家族団らんの夕げが待っていた。「学校」「家庭」「地域」が子どもたちの安心して過ごせる居場所としてまがりなりに機能していたのである。昭和30年代を多く市民がノスタルジーを持って懐かしむのはそのためである。

それが、1980年代に入ると、大分様相が異なってくる。従来までの安定した「学校」や「家庭」や「地域」のありようが大きく揺らぎ始めるのがこの時期だ。

この時期、校内暴力や家庭内暴力など「荒れる中学生」の存在や小中学生の自殺が社会的な問題になるとともに、不登校児童の問題が「登校拒否」と呼ばれ顕在化

し始める。

「中学生による『ホームレス』殺傷事件」のあと、ある市民団体が開催した集会での、ある中学3年生の女子生徒の発言は示唆的だ。

「非行少年の温床となるたまり場を一扫する市民運動を展開すべきだ」という中年男性の発言に続けて彼女は言う。

「私たちは、小さいころから遊び場がないし、反論になっちゃうんですが、たまり場がないんです。学校



いるのかというと、私たちを成績順に並べて、お前はこの学校だという風に、そう私は感じているんです。たまり場をなくしちゃうというけど、じゃあもつといたまり場というか、私たちの居場所を作ってほしいんです。そういうのを大人の人がもう少し考えてください」(『浮浪者』殺傷事件を考へる集い報告集』3・6集い実行委員会発行、1983年)

くことに対する無意識の不安といらだち。こうした感覚を、横浜という都市において多感な思春期に体験したのは、当時、ローティーンだった今の30歳代が最初の世代だった。そして、この数年後、彼らが大卒であれば就職期を迎える1990年代の始めに今度は会社すら、彼らの親たちの世代とは異なり、自らの生活の安心・安定を保障する場ではなくなり始めていくという事実直面することになる。

バブル経済崩壊とともに、終身雇用制の終焉や正規雇用者の減少が始まり、「フリーター」という生き方が世の中に広がっていく。

居場所は見つかったのか？

襲撃事件の加害者の少年たちも、この集会で発言した少女も、今、大人となつて、どこで、どのような生活をしているのだろうか。まだ横浜に住んでいる、なにを仕事として生きているのか？ 結婚は？ 子どもは？

そしてなによりも、彼ら、彼女に、本当の意味での「居場所」は見つかったのだろうか。

からは放課後になると追い出されるし、どこへ行ったらいいかというところにもないんです。家に帰って1人でテレビを見ているんです。おもしろいから熱中しちゃうけど、考えてみたらすごく淋しいんですよ。

友だちとか親友とかはテレビの中だけの話で、嘘っぽくて。受験とかいうのは人との闘いでネ。先生たちは、淋しいネというけれど、じゃ先生は、何をやって

うなパーチャルな世界がまったく存在していなかったこの時代にすら、10歳代の児童・生徒たちには、人と人とのリアルなコミュニケーションを実感できる機会が、学校や家庭においても、すでにテレビが提供する虚構の現実を通じてでしかありえなくなつてしまつていくという事実。そして学校や家庭、地域といった安心して寄りかかることのできるはずの「場」(共同体)の機能が縮小・解体してい

この市民生活白書では、今の30歳代の市民の居場所のありようを子育てや教育という切り口でとりあげる。そして、少年たちによって殺されていったホームレスの居場所のありかたとともに、私たちがこの横浜の中で、多様な暮らしをする市民が、自立しながら様々な居場所を共有化するにはどうすればいいのかということも考えてみよう。